

小高根 次郎(おだかね・じろう)

1、プロフィール

詩人、作家、文芸評論家。旧制弘前高校、東北帝大卒。戦前は保田與重郎らの「コギト」、立原道造らの「四季」に加わり、詩人伊東静雄らと交流。戦後は同人誌「果樹園」主宰。

<生没>

1911(明治 44)年3月 10 日 ~ 1990(平成2)年4月 14 日

<代表作>

『詩人、その生涯と運命―書簡と作品から見た伊東静雄』

<青森との関わり>

旧制弘前高校在学。棟方志功研究者としても知られる。同人誌「果樹園」に棟方志功の評伝などを連載した。

2、作家解説

東京生まれ。高校時は画家を志し、棟方志功に師事。東北帝国大学に進み、昭和9(1934)年卒業。日本レイヨン勤務の傍ら、保田與重郎、田中克己らの「コギト」、堀辰雄、三好達治らの「四季」(第2次)に加わり、詩を発表。詩人の伊東静雄や蓮田善明、立原道造らと交流。昭和 16 年、処女詩集『はぐれたる春の日の歌』をコギト発行所より出版(装幀棟方志功)。ついで昭和 18 年、小説集『浜木綿の歌』(小学館)を上梓。戦後は池田市に居住し、昭和 31 年より文芸誌「果樹園」を主宰、伊東の書簡を蒐集し、彼の伝記を連載した。これは伊東の全集が未刊行だった当時貴重な資料であり、伊東研究の先駆的な基礎文献となった。また青森出身の版画家棟方志功の伝記も連載、企業小説も書いた。『郷愁に愛と夢とを』(臼井書房昭和 22 年)、『棟方志功その画魂の形成』(新潮社昭和 48 年)、『湧然する棟方志功』(新潮社昭和 49 年)、『歓喜する棟方志功』(新潮社昭和 51 年)、『総務部長憤死す』(日本経済新聞社昭和 53 年、徳間文庫平成元年)、『再

建腕くらべ』(日本経済新聞社昭和 56 年)、『会社再建腕くらべ』(徳間文庫平成 2 年)、『吉井勇一英雄歌人の黙契』(沖積舎「作家論叢書」昭和 59 年)、『足穂入道と女色小説集』(雪華社昭和 60 年)、『歌の鬼・前川佐美雄』(沖積舎「ちゅうせき叢書」昭和 62 年)他。編纂に『伊東静雄全集』(全 1 巻、桑原武夫、富士正晴共編、人文書院昭和 41 年、増補改訂版昭和 55 年)、『蓮田善明全集』(全 1 巻、島津書房平成元年)。小高根の業績は何と言っても『伊東静雄全集』の編纂をはじめ、『詩人、その生涯と運命』を著すなど、伊東の文学をその書誌的整理から作品研究まで手がけ、その後の伊東や「四季」「コギト」の詩人たちの研究に道を開いたことである。生前の伊東と親しかったという事実だけでなく、小高根自身が詩人であったことがその論考に奥行きを与えている。この詩人としての感性こそ「果樹園」を長らく刊行し続けることができた根源であろう。同時にそれは、生き残った者が捧げなければならぬ、先立った詩人たちへの鎮魂の誌でもあった。「果樹園」は合本となって青森県立図書館にも保管され、閲覧可能。

3、資料紹介

○『詩人、その生涯と運命―書簡と作品から見た伊東静雄』

図書

1965(昭和 40)年 5 月 10 日

220mm × 160mm

伊東静雄の書簡、日記を作品と関連づけながら、伊東の詩業の伝記的・精神的軌跡を詳細に跡づけた労作。雑誌「果樹園」創刊号から長く連載されたものを一冊にまとめたもので、伊東の伝記的史実が明らかにされている上に、抒情性の由来をも知ることができる。